文五郎の「お染」と「お園」(一)

『染模樣妹脊門松』

質店のお染

大西重孝

榮三と共に、文樂人形陣の双璧と讃へられた文五郎は、一昨年末朽木の倒れるやうにポツコリと榮三が亡くなつてから、彼一人の肩に大きな責任を背負ひ込むこととなつた。榮三の堅實な內面的な藝風に對して、飽くまで華麗な屈託のない彼の演技は、兩者が對照的な位置におかれてこそ、初めてその輝きを增すものと考へてゐた自分は、そのよき相手方を失ひ、一座の把ねとなつた彼に、何故とはなく脆弱な不安を抱いた。然しそれは杞憂に過ぎなかつた。四ツ橋に文樂座の再興を見て以來、彼の活躍に粘り强い藝根の逞しさを見出して大いに意を强くしてゐる。『質店』のお染といひ、『酒屋』のお園といひ古靱太夫の磨きに磨かれた淨瑠璃と共に、床と勾欄とが渾然と溶け合つた三昧境を展開してくれたのである。狂言の選擇が種々の制約を受けて世話ものが重きをなすやうになつた今日、彼の得意な役どころで實力を發揮する機會が益々多くなることであらう。最近の文五郎の好演技として、珍らしかつたお染と、比較的型の崩れてゐないお園とを擧げて、自分の記錄から左に拔萃して見る。

かしらは「娘」、お染髷に花簪、黑襦子の襟をかけた段鹿子の振袖の着付に、赤の鹿子絞りに黑襦子で緣をとつた文庫帶。

扨て「居間へ這入れば」が柝頭で、「九ツの鐘かう〳〵と」から三重になつて、質屋の店先から奥庭の道具に替る。上手に張りものの土藏、正面に窓がつけられてゐる。下手には紙障子で閉された佛間の屋體、中壺に切出しの石燈籠が一つ、うしろは塀の書割、船底下手寄りに庭木戸を飾つて總て雪の積つた景色。

「とオどーろーかーすウウ……(シャーン、チチチン、シャン〳〵〳〵〳〵、チチチン、チーン、チン)むウねーエエーもオオオオオオオ、オオオ、オーオオ、オーオオ、オオオ(チチチン)オオオオー(チチチン)オー」と、大晦日の夜更け、やがて起るべき悲劇を包んで、必死の覺悟のお染の出に適はしい緊張が漲る。「板緣(チン)そオろーそオろーと(ツッチントン)」と淨瑠璃は進んで「忍び出でたるウウ」で、下手小幕から光の洩れないやうに朱塗りの雪洞を左袖で圍つて、前後に氣を配りながらお染が出る。「戀路の闇の」までに木戸へ來て、雪洞をかざして內を窺ひ、ひとり頷いてから少し退つて「心はーさアきイへエエエーエエ、エエ、エーエ、エエエエ、エエーエ、エエーエ、エエエエエ」雪洞を背後へかくして、クルリと後向けとなり、やゝ反り身で正面奥の方と、下手上手を窺ひ、やがて半身をねじむけて火を吹消す。あたりは一面の闇の底に沈んで、ほのかな

雪明りの中にお染の振袖姿が美しく浮び上る。（チチン、チンチリガンチントチントッチントッチン）の合の手の間に正面に戻り、駒下駄を脱いで（小道具の駒下駄が差出される）、その上に雪洞を置く。「飛石の冷さこはさふるはれて（ツン）膝もわアなー〳〵」で、木戸から這入つて「さぐり寄つたるウウウウウ（チリガン）ウウウ……」右袖を口に當てゝ尚も下手へ氣を配り、そしてさぐり手で眞中へ進み「藏のまアへー」一杯に、漸く窓の下まで辿りつき、トンと足拍子を入れると共に、左手を左遣ひに預けて、眞後ろを見せた片手遣ひのネジとなり、壁にとりついて伸び上るやうに窓を見上げて『久松そこにか、冷たかろ』と呼びかける。

窓を明けて久松が姿を見せる。『逢ひたかつたお染様、今生の逢ひ納め、今一度お顔が見たけれど、心に任せぬ今宵の闇……』と、久松の悔恨に滿ちた述懐を、雪の中にうづくまつて顫へるお染は、かじかむ手に息を吹きかけながら聞いてゐるが、『くりとながらお前は永らへ』後弔ふて……」と、云はれて顔をあげ『オヽ道理ぢや〳〵道理ぢやわいなア……』と、泣き『わしとても親々の心に背く夫結び、ふり捨てゝ山家屋へたとへ往たとて人の口、アーレ』から節になつて「山家屋の一嫁を見い」と、兩袖を左右に展げて腰を浮かせて、頭をやゝ左にかしげて優しく正面向ふを見やり、やがて腰を下すと共に恥しげにサツと袖で顔を掩ひ「可愛さうに久松が」左手で久松の方を指差し「思ひー（チン）詰めェーて」兩方の指先を揃へて眺め「死んだのを（チンチンチン）」胸を抱いて俯き「見捨てゝ直ぐに嫁入りは（チンチンチン）」正面向ふを右手で指差して見やり「おほーしんだいの山家屋でーェ」右手を大きく右へ渡しながら下手斜になり、逆に左手を大きく左へ渡しながら正面に戻り、兩の袖を腕に捲いて、次の「エエエエエエエ（チチン）」と節にのつてトン、トン、トン……と足拍子を入れて上手へ進み「榮耀がしたさぢや」でトンと左足で止つて、右足を入込み「みーなア」クリ頭をしながら右手を左遣ひ預けると共に「慾ぢや」で、クルリと廻つて後振りになる。後から見るお染謠の愛らしさ、首筋に相當する、「ドウ木」が襟元とつくる角度の好もしさ、桃の枝を染め拔きにした絣縮緬に黑襦子のひだをとつた隋圓形の飾り布が襟元から文庫帶の上に冠さつた工合、そして左右に長く垂れ下つた帶の端と共に、文樂の娘人形の美しさを、今一つこの後姿に發見する。そして、「アーア、アーア」と、一つに揃へた袖を右から振つて來ると共に、頭を逆に左から振つて來て「アアア、アアアア……」と段々に早間になる。後振りは女形の人形振りの内でも、最も美しさを發揮するところであるが、お染のこの件は淨瑠璃の節にのつてとき色と水淺黄とに染分けた振袖が、左右に搖れるのが特異である。トドその袖を顔に當てゝ腰を落すと、トンと足拍子を入れる。（チンチンチンチン）正面に戻つて「厚皮面の女ぢやと」右ひざを立てかけて、右から自分の姿を見下し、反對に左ひざを立てかけて同じく左から見下し「大阪中に指さゝれ」前に揃へた兩手を左右に展げ「人にイイイにくウまアれ」再び袖を腕に捲いて立上り「わーア、らーア、わアれェェてェェェェ」摺り足で、節にのつた華麗な振りがあつて「人交りが……」で、トンと右足を入込んで、久松の方を見返り、

すぐ氣を換へてトーンと下手斜に身體をそむけ、グリ頭をして袖を咬へて泣きあげるのが「なろかいなアアア、……」にはまる。「(チチチチ、チーン、チリチンチン)生恥をさらさふより」腕に捲いた袖を、右から左の順で、やゝ蓮葉に前に振つて戻し「(チンチン)いとしいそなたと」立上つて「一ッ時に」

で、トンと左足で踏んで右足を入込み、右手を左遣ひに預けて、斜に後を見せたネジの形で、再び藏の久松を見上げて「死んで未來の契が樂しみ」となる。形を解いて坐り「かなアらずーしかつてたもんな」と合掌してから、もう一度腰をあげてトンと右足を入込んで、藏を見上げ「くウどオきイ歎くぞーオオどオオーりなアーるウウ…」一杯に後へ戻り、勾欄のところで、頭を下手向けにして横に倒れて泣きもだえる。『アヽコレ聲が高い……』と、久松にたしなめられ、起上つて『可愛や、因果な腹に宿つて月日の光も見ず、闇から闇に迷ふと思や、身ふしが碎けていぢらしい、いぢらしいわいの』と悲しむ。『ヲ、さうでござりますとも、その子ばかりかお前も……』『そなたも……』『この世の名殘りは眞の闇』『ところ隔てゝ死ぬるとも未來は必ず一つ蓮』『ヲ、連立つて參ります』と詞が渡つて「内と外とに園原や(チチン)ありとは見えて聲ばかり……」、節は急調にたゝみ込んで來て、お染は立上り、トンと足拍子を入れて、兩袖を展げた形で、見えぬ久松の姿を求めて見上げ、すぐトントントン……と、後へよろけて蹲り、泣きもだえるのが「今を(チチン)かアーぎイーりイのー暇ごオーひ、イイイ……」である。

下手屋體の障子が開かれ、佛壇に向つて坐つた親太郎兵衛の白骨の御文章が始まる(昭和廿一年三月、文樂座=以下次號寫眞は樂屋の吉田文五郎(サン寫眞新聞撮影)